北星学園大学文学部北星論集第53巻第１号（通巻第62号）（2015年９月）・抜刷

高校生における親との関係と進路選択自己効力および職業未決定との関連

鹿　内　啓　子

高校生における親との関係と進路選択自己効力および職業未決定との関連

鹿　内　啓　子
Keiko SHIKANAI

目次

Ⅰ　問題
Ⅱ　方法
Ⅲ　結果
　1．親との関係の認知尺度の因子構造
　2．親との関係の認知と進路選択自己効力および職業未決定との関連性
　3．親との関係の認知のタイプと進路選択自己効力および職業未決定との関連性
Ⅳ　討論
　1．親との関係の認知と進路選択自己効力および職業未決定との関連性
　2．親との関係のタイプと進路選択自己効力および職業未決定との関連性
　3．親との関係の関連性における進路選択自己効力と職業未決定の差異

［Abstract］
A Study of Parent-Adolescent Relationships and the Career Decision-Making Self-Efficacy or Indecision of High School Students

This study investigates how parent-adolescent relationships relate to the career decision-making self-efficacy or indecision of high school students. A questionnaire with a parent-adolescent relationship scale, a career decision-making self-efficacy scale, and a career indecision scale was administered to 634 high school students. The parent-adolescent relationships were divided into four types: (a) respect-type, (b) interference-type, (c) independent-type, and (d) average-type. Students of the respect-type have high self-efficacy and high motivation for a career. Students of the interference-type have low self-efficacy and low motivation for a career. Male students of the independent-type have the next highest self-efficacy after the respect-type. On the other hand, the independent-type relates to low self-efficacy for female students. The average-type is related to low self-efficacy only for male students. Male students are less dependent on parents than female students. Therefore, low interference from parents has positive effects on self-efficacy for male students. For female students, communicating with parents promotes self-efficacy.

Ⅰ　問題

青年期のアイデンティティ確立の柱の１つは職業選択であるとされてきた。自分に相応しい，あるいは自分がやりたい仕事に就くことによって，自分の社会での役割を果たすことができ，それがアイデンティティの重要な要素となるのである。ところが昨今の若者の就職状況は厳しく，やりたい仕事に就くことができる若者は多くない。正規採用に至らず非正規雇用に甘んじざるを得ない若者も多い。また正社員になれたとしても長時間労働やノルマの強制など劣悪な労働条件のために心身に不調をきたす若者も増加している。このように今は，職業に就くことによってアイデンティティが確立されるとは言い難い状況となっている。しかし職業選択が若者にとって重要な課題であることは変わらず，むしろこのように若者にとって厳しい状況だからこそ，どのような職業に就いたらいいのか，どのように職業を選べばいいのかは，若者にとってよりいっそう重大な課題となってきている。

今は大学や専門学校への進学者が増加して

キーワード：進路選択自己効力，職業未決定，親との関係，高校生
Key words：Career Decision-Making Self-Efficacy, Career Indecision, Parent-Adolescent Relationship, High School Students

いるので，高校卒業時に職業を選択しなければいけない生徒は少なくなっている。しかし自分に相応しい職業を決定するためには高校で適切な将来展望をもった進路選択をすることが重要である。とりあえず進学するのではなく，将来の目標を見据えてその実現のために必要な進路を決定することが大切なのである。

これまで高校生の進路意識とそれに関連する要因についての研究が数多くなされてきたが，進路選択や職業決定過程に影響する要因として自己効力感が取り上げられてきた。進路選択に対する自己効力感とは，進路選択に至るまでに必要な行動の計画を立てそれを遂行でき，その結果適切な進路選択ができるという有能感である。Taylor & Betz（1983）は，職業についての効果的な意思決定において自分の決定能力に自信をもつことが必要であり，意思決定に対する自己効力が弱い場合には，職業不決断などの問題が生じる可能性があると考えた。そして進路選択に対する自己効力感を測定する尺度であるCDMSE（Career Decision-Making Self-Efficacy Scale）を作成した。

浦上（1993）は，男女高校生を対象にTaylor & Betz（1983）のCDMSEと板柳・竹内（1985）の進路成熟度尺度を６月と２月の２回実施し，その間の変化をみている。６月の時点で職業的進路成熟度が高い者のうち，自己効力感も高ければ２月の時点でも高い進路成熟度は維持されているが，自己効力感が低い場合には２月の時点で低下していた。また６月において進路成熟度が低い場合は全体的に２月で成熟度が上昇していたが，特に自己効力感が高い場合に上昇が大きいという結果が得られた。高い進路成熟度のためには高い自己効力感が必要であることを示している。

また高須（1997）はCDMSEを５因子に修正し，進路に関する意識の８要因との関連を，自己効力感→進路意識→進路実現のための試みという経路を想定したパス解析によって検討した。その結果，自己効力感は進路実現のための試みにポジティブな関連をもち，また希望進路未決定による不安を低減すること，結果予期の高さは学力不足による不安を低減することなどが明らかにされた。鈴木・椎名・石塚・柳井（1997）は，全国の多数の高校生サンプルについて，学歴志向，学習努力，進路展望の３次元から構成される進路意識と，成績，親の期待，高校の特徴などの要因との関連，また学業志向動機とモラトリアム動機からなる進学動機と進路意識との関連を検討した。その結果，進路展望が進学への動機づけのキーポイントであることが明らかになり，さらに進路意識未成熟者の特徴として，学業志向動機が低くモラトリアム動機が高いこと，将来の進路に影響する要因として運と能力を重視し努力を軽視していること，希望進路の実現可能性を低く認知していることなどが示された。自己効力感という用語は使われていないが，自分の努力が進路に影響すると思うよりも自分では統制不可能な運や能力によって進路が決まると考える傾向や，希望進路の実現可能性を低く認知するという自分が望む結果を自ら実現させる有能感の欠如は，まさに進路意識未成熟な者の自己効力感の低さを表わしている。このように，自己効力感は高校生の進路選択過程に対して強い関連性をもつ要因である。

青年期において職業決定がアイデンティティ確立の重要な要素であることから，下山（1986）は職業決定の状態を測定するための「職業未決定尺度」と自我の確立の程度を測るための「自分の確立尺度」を作成した。両者の関係を検討したところ，職業未決定の「混乱」，「未熟」，「安直」，「猶予」，「模索」，「決定」の各状態は，それぞれに特徴的な自我の確立状態と対応していることが明らかになった。本研究では高校生を対象にしているので，

職業決定の進み具合は大学生より遅くなっているだろうが，未決定の状態それ自体は共通であると考えられるので，この尺度を用いて高校生の職業決定状態に表れたアイデンティティの確立を検討する。

鹿内（2005，2010，2012）では，大学生について，大学生が認知している親との関係と職業未決定との関連性を検討している。父親についても母親についても，また男子女子を問わず，全般的に親を自分の生き方のモデルにできている望ましい関係は大学生の職業決定と関連しているが，父親よりも母親の影響が強いことが示された。また鹿内(2005)では，母親を生き方のモデルとみなすことが女子学生では職業決定を高めるが，男子学生では職業の「決定回避」および「混乱」の強さと結びついていることが明らかになった。「決定回避」は職業に就くことを重要視せず，できれば職業をもたず好きなことをしていたいと思う傾向であり，「混乱」は自分が働く姿をイメージできず，誤った職業決定をしてしまう不安が高く，職業に就いてもうまくやる自信がない傾向であることから，男子学生の母親へのモデリングはアイデンティティの確立を促すものというよりも母親への依存を示すものであり，職業決定による自立を妨げる作用をもつものと解釈された。鹿内(2004)では，女子高校生について，進路を決定している女子生徒は未決定の女子生徒より親とのコミュニケーションが多い傾向がみられたが，その差は小さく，また親を望ましいモデルとみなす傾向および親の指図や期待を強さを示す指示的態度には進路決定者と未決定者との差がみられなかった。ここでは進路選択群と未決定群の比較だけがなされ，親との関係と進路や職業に対する意識との関連性の細かい検討はなされていない。

そこで本研究では，男女高校生について，生徒自身が認知する親との関係と進路選択自己効力感および職業未決定との関連性を検討する。また１年生から３年生までを対象とするため，学年による差異の検討も行う。

Ⅱ　方法

１．調査対象者

札幌市内のＨ高等学校の全クラスの生徒を対象とした。回答者は，１年生232名，２年生230名，３年生200名であった。回答に不備のあるものを除いた結果，分析に用いたサンプル数は，１年生223名（男子116名，女子107名），２年生226名（男子129名，女子97名），３年生185名（男子113名，女子72名），合計634名であった。

２．調査内容

（１）進路選択自己効力感尺度

富永（2006）の「進路選択自己効力感尺度」を参考にして，進路を選択・決定していく過程で必要な事柄12項目について，うまくやっていく自信の程度を５段階で評定させた。主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った結果，２因子構造が示された。第１因子は，自分に適した職業を決めることや見通しをもってやるべきことの計画を立てることに対する自信を表わす項目からなる「計画・決定効力」因子，第２因子は，先生や親など身近な人に進路を相談することや進学や就職の情報を集めることに対する自信を表わす「相談・情報効力」因子である。さらに１因子構造として扱っている研究が多いことから，上の２つの下位尺度得点に加えて，全般的な自己効力感の指標として，全項目の得点を加算したものを「自己効力」得点として分析に加える。

（２）職業未決定尺度

大学生の職業未決定状態を測定するために下山（1986）によって作成された「職業未決定尺度」39項目から選択した31項目について，女子高校生を対象に因子分析した結果（鹿内，

2004）を参考にして，15項目を用いた。各項目について自分に当てはまる程度を５段階で評定させた。主因子法（プロマックス回転）による因子分析の結果，３因子構造と判断した。第１因子は，将来の職業をまだ決められていない状態を表わす項目が含まれ，「未決定」因子と解釈した。第２因子は，働いている自分をイメージできないことや職業決定に対する不安を表わす内容であることから，「未熟・不安」因子と名付けた。第３因子は，職業について考えることへの意欲の低さと採用してくれるならどんな職業でもよいという安易な構えを示しており，「未熟・不安」尺度と名付けた。

（３）親との関係の認知尺度

大学生について，父親および母親と自分との関係の認知を測定するための尺度として鹿内（2005）が作成した「親の態度認知尺度」14項目は，高校生にも使用可能な内容であることから，この中から９項目を選んだ。質問紙の回答に要する時間を考慮して父親と母親を分けず，「お父さんやお母さんに対してどう思っていますか」という形で全般的な親との関係の認知を５段階で評定させた。

３．調査手続き

高校にお願いし，授業時間の一部を割いて授業担当教員に実施していただいた。所要時間は15～20分であった。なお今回を１回目としたパネル調査を計画しているため，記名をお願いした。その際には，同一人物を同定するために記名が必要なこと，回答は研究の目的以外には使わないこと，個人の回答は問題にせず全体の傾向をコンピューターによって分析することを説明して記名への理解を求めた。さらに，回答した調査用紙は自分で封筒に入れて封をして提出させ，プライバシーの保護に配慮した。

４．調査時期

2014年６月

Ⅲ　結果

１．親との関係の認知尺度の因子構造

高校生が認知している親との関係を測るための９項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。これまでの検討では２因子または３因子構造が得られてきた。固有値が1.0以上であることを基準にした場合２因子が抽出されたが，２因子の説明率が38.00％と不十分であり，また同じく高校生を対象にしたときに３因子構造が得られた（鹿内，2004）こともあり，因子数を３に指定して再度因子分析を行った。その結果，説明率は42.93％となり，解釈可能な因子が得られた。

第１因子は，「社会人として尊敬できる」，「将来を考えるときのよいモデルになる」，「仕事や人生についてのアドバイスをくれる」，「自分の仕事にやりがいを感じている」の４項目で因子負荷量が高かったことから，親に対する「尊敬」因子と名付けた。なお「仕事や人生についてのアドバイスをくれる」は第２因子にも負荷量が高かったが，大学生では「尊敬」因子に含まれていた（鹿内，2005）ので，ここに含めた。第２因子は，「将来のことについて話し合うことが多い」，「私の職業や生き方について，親の期待を感じる」の２項目が含まれ，親との「会話」因子とした。第３因子は，「職業や生き方について，いろいろ指図をする」，「今の私の状態について，親は不満をもっている」，「進路や職業については，私に任せている」（逆転項目）の３項目からなり，「指図」因子と名付けた。

これら３つの因子それぞれに含まれる項目の評定値の合計を項目数で除した得点を，各下位尺度得点とした。得点が高くなるほど，下位尺度名が表す傾向が強いことを示す。

２．親との関係の認知と進路選択自己効力および職業未決定との関連性

親との関係が進路選択自己効力および職業未決定とどのような関連をもつのかを検討するために，サンプルを親との関係の各下位尺度得点についてほぼ1/3ずつになるように，学年別，男女別に高群，中群，低群の３群に分けた。進路選択自己効力および職業未決定の各下位尺度について，学年ごとに，親との関係×性別の３×２の２要因の分散分析を行った。

なお，進路選択自己効力と職業未決定の下位尺度得点は，各下位尺度に含まれる項目の評定値の合計を項目数で除したものである。得点が高くなるほど，各下位尺度名で表わされる傾向が強いことを示す。

（１）進路選択自己効力について

進路選択自己効力の３つの下位尺度についての分散分析の結果が表１である。

「尊敬」については，すべての自己効力下位尺度において親との関係の主効果が有意であり，交互作用は有意ではなかった。親との関係３群の多重比較の結果，１年生ではすべての下位尺度で高群が低群および中群より高いが，２年生と３年生ではすべての下位尺度で高群が低群より有意に高くなっていた。このように，中群の位置に学年による差異が見られるものの，性別や学年に関わらず「尊敬」得点の高さはすべての進路選択自己効力の高さと関連していた。

「会話」については，相談・情報効力の１年生を除き，すべての学年，全ての自己効力下位尺度で親との関係の有意な主効果が得られ，性別との交互作用はすべて有意ではなかった。相談・情報効力の１年生でも親との関係の主効果は有意な傾向にあった。親との関係の多重比較を行ったところ，相談・情報効力の１年生では有意差がみられず，計画・決定効力の１年生では高群が低群より有意に高かったが，他ではすべて高群が低群および中群より有意に高いという結果が得られた。

「指図」については，１年生では計画・決定効力と自己効力で親との関係の主効果は有意でなかった。また１年生の相談・情報効力では交互作用が有意だったので単純主効果の検定を行ったところ，男子だけで高群と低群が有意に中群より高く，女子では群間の差がなかった。２年生および３年生では，親との関係の主効果は３年生の相談・情報効力で有意な傾向にとどまったものの，他のすべての自己効力下位尺度では有意となり，多重比較では低群が高群あるいは中群より有意に高いという結果が得られた。

（２）職業未決定について

職業未決定の３つの下位尺度についての分散分析の結果を表２に示した。

「尊敬」については１年生と２年生の未決定および安直・回避で高・中・低３群の主効果が有意であり，１年生の安直・回避では低群が高群より高いが，その他では高群が中群より未決定および安直・回避傾向が弱い。未熟･不安ではどの学年でも主効果がみられず，また３年生ではすべて有意ではなかった。性別との交互作用は２年生の未熟・不安で有意な傾向があったものの単純主効果の検定では有意な効果はなかった。

「会話」については，２年生と３年生の未決定，２年生の未熟・不安，１年生と２年生の安直・回避で高・中・低３群の有意な主効果が見られた。いずれも高群が低群よりこれらの傾向が弱い。また１年生の安直・回避では中群も高群より有意に高い。有意な交互作用は見られなかった。

「指図」については，未決定ではどの学年でも高・中・低３群の主効果は有意でなかったが，未熟・不安および安直・回避では２年生と３年生で有意な主効果が得られた。２年生では低群は高群と中群より未熟・不安傾向と安直・回避傾向が弱い。３年生では低群は高群より未熟・不安傾向が弱く，低群と中群

表１　進路決定自己効力の３下位尺度についての親との関係の高中低３群×性別の分散分析結果

			尊敬３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
計画決定効力	１年	男子	3.06 (0.64)	3.01 (0.60)	3.59 (0.66)	F (1/213) =4.61*	F (2/213) =7.67**	F (2/213) =1.99	高群＞低群，中群
		女子	2.89 (0.65)	3.03 (0.79)	3.16 (0.68)				
	２年	男子	2.89 (0.74)	3.00 (0.82)	3.48 (0.88)	F (1/217) =7.21**	F (2/217) =4.37*	F (2/217) =1.62	高群＞低群
		女子	2.71 (0.88)	2.86 (0.62)	2.91 (0.90)				
	３年	男子	2.91 (0.95)	3.18 (0.67)	3.51 (0.77)	F (1/177) =0.13	F (2/177) =5.29**	F (2/177) =0.79	高群＞低群
		女子	2.91 (0.66)	3.29 (0.70)	3.28 (0.74)				
相談情報効力	１年	男子	3.23 (0.88)	3.40 (0.62)	3.83 (0.75)	F (1/213) =0.85	F (2/213) =7.10**	F (2/213) =0.54	高群＞低群，中群
		女子	3.22 (0.76)	3.37 (0.71)	3.58 (0.91)				
	２年	男子	3.28 (0.92)	3.56 (0.87)	3.74 (0.85)	F (1/217) =0.55	F (2/217) =5.01**	F (2/217) =0.17	高群＞低群
		女子	3.23 (0.94)	3.37 (0.95)	3.71 (0.71)				
	３年	男子	3.17 (1.08)	3.44 (0.81)	3.77 (0.97)	F (1/177) =5.17*	F (2/177) =4.77**	F (2/177) =0.05	高群＞低群
		女子	3.54 (0.86)	3.76 (0.90)	4.03 (0.72)				
自己効力	１年	男子	37.25 (7.84)	37.30 (6.21)	43.83 (6.90)	F (1/213) =4.15*	F (2/213) =9.45***	F (2/213) =1.85	高群＞低群，中群
		女子	35.62 (7.39)	37.37 (8.44)	39.23 (7.52)				
	２年	男子	35.84 (8.57)	37.67 (9.14)	42.57 (10.13)	F (1/217) =5.53*	F (2/217) =5.29**	F (2/217) =0.87	高群＞低群
		女子	34.10 (10.17)	35.82 (7.80)	37.31 (8.88)				
	３年	男子	35.72 (11.45)	38.89 (7.98)	42.87 (9.38)	F (1/177) =0.17	F (2/177) =5.66**	F (2/177) =0.52	高群＞低群
		女子	36.78 (8.08)	40.87 (8.13)	41.57 (8.15)				

			会話３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
計画決定効力	１年	男子	3.07 (0.66)	3.09 (0.55)	3.44 (0.73)	F (1/215) =3.32	F (2/215) =4.07*	F (2/215) =0.43	高群＞低群
		女子	2.95 (0.67)	2.98 (0.78)	3.15 (0.74)				
	２年	男子	2.93 (0.68)	3.00 (0.87)	3.64 (0.88)	F (1/219) =11.50***	F (2/219) =9.92***	F (2/219) =1.49	高群＞低群，中群
		女子	2.51 (0.74)	2.87 (0.66)	3.07 (0.98)				
	３年	男子	3.00 (1.06)	3.14 (0.67)	3.54 (0.72)	F (1/178) =0.16	F (2/178) =7.14***	F (2/178) =0.04	高群＞低群，中群
		女子	2.99 (0.59)	3.05 (0.62)	3.50 (0.81)				
相談情報効力	１年	男子	3.46 (0.77)	3.31 (0.80)	3.67 (0.77)	F (1/215) =0.96	F (2/215) =2.88†	F (2/215) =0.30	
		女子	3.26 (0.80)	3.32 (0.84)	3.53 (0.74)				
	２年	男子	3.32 (0.77)	3.51 (0.94)	3.91 (0.85)	F (1/219) =1.11	F (2/219) =11.06***	F (2/219) =0.29	高群＞低群，中群
		女子	3.10 (0.85)	3.34 (0.80)	3.91 (0.89)				
	３年	男子	3.14 (1.17)	3.41 (0.84)	3.95 (0.80)	F (1/178) =3.48†	F (2/178) =10.84***	F (2/178) =0.34	高群＞低群，中群
		女子	3.32 (0.97)	3.81 (0.73)	4.13 (0.71)				
自己効力	１年	男子	37.97 (7.07)	37.73 (6.86)	41.95 (7.87)	F (1/215) =3.20	F (2/215) =4.67**	F (2/215) =0.37	高群＞低群，中群
		女子	36.36 (6.99)	36.78 (8.73)	38.93 (8.20)				
	２年	男子	36.33 (7.85)	37.56 (9.88)	44.47 (9.95)	F (1/219) =9.10**	F (2/219) =12.02***	F (2/219) =0.80	高群＞低群，中群
		女子	31.92 (8.52)	35.84 (7.59)	39.33 (10.17)				
	３年	男子	36.38 (12.88)	38.45 (7.98)	43.72 (8.32)	F (1/178) =0.06	F (2/178) =8.84***	F (2/178) =0.00	高群＞低群，中群
		女子	36.84 (7.66)	38.86 (6.66)	43.88 (9.04)				

			指図３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
計画決定効力	１年	男子	3.29 (0.62)	3.03 (0.69)	3.39 (0.68)	F (1/216) =4.77*	F (2/216) =1.74	F (2/216) =1.12	
		女子	3.11 (0.78)	2.99 (0.55)	3.00 (0.80)				
	２年	男子	3.47 (0.91)	3.10 (0.81)	2.97 (0.86)	F (1/218) =8.84**	F (2/218) =4.08*	F (2/218) =0.21	低群＞高群
		女子	3.03 (0.77)	2.77 (0.84)	2.72 (0.77)				
	３年	男子	3.47 (0.85)	3.19 (0.72)	2.81 (0.84)	F (1/177) =0.02	F (2/177) =5.09**	F (2/177) =0.79	低群＞高群
		女子	3.33 (0.84)	3.15 (0.55)	3.04 (0.70)				
相談情報効力	１年	男子	3.66 (0.77)	3.12 (0.74)	3.74 (0.73)	F (1/216) =1.52	F (2/216) =3.42*	F (2/216) =3.59*	高群，低群＞中群
		女子	3.44 (0.82)	3.38 (0.71)	3.32 (0.84)				
	２年	男子	3.84 (0.90)	3.39 (0.94)	3.56 (0.77)	F (1/218) =1.76	F (2/218) =3.44*	F (2/218) =0.26	低群＞中群
		女子	3.63 (0.66)	3.34 (1.04)	3.33 (0.82)				
	３年	男子	3.79 (0.99)	3.51 (0.87)	2.97 (1.04)	F (1/177) =6.95**	F (2/177) =2.67†	F (2/177) =2.83†	低群＞高群
		女子	3.73 (1.00)	3.90 (0.65)	3.76 (0.88)				
自己効力	１年	男子	40.55 (7.39)	36.63 (7.40)	41.72 (7.13)	F (1/216) =4.68*	F (2/216) =2.69†	F (2/216) =2.01	
		女子	38.26 (8.21)	37.00 (6.41)	36.97 (8.88)				
	２年	男子	42.76 (10.51)	38.09 (9.34)	37.43 (9.42)	F (1/218) =7.52**	F (2/218) =4.37*	F (2/218) =0.16	低群＞高群，中群
		女子	38.14 (7.69)	34.98 (10.24)	34.50 (8.09)				
	３年	男子	42.64 (10.14)	39.20 (8.66)	34.24 (10.20)	F (1/177) =0.82	F (2/177) =4.69**	F (2/177) =1.36	低群＞高群
		女子	41.19 (10.14)	40.04 (5.84)	38.67 (8.12)				

†$p<.10$，*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$　（　）内はSD

表２　職業未決定についての親との関係の高中低３群×性別の分散分析結果

			尊敬３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
未決定	１年	男子	3.03（1.05）	3.14（1.17）	2.53（1.05）	F（1/213）=0.24	F（2/213）=3.51*	F（2/213）=0.43	中群＞高群
		女子	2.87（0.98）	2.96（1.23）	2.66（0.98）				
	２年	男子	3.00（1.20）	3.10（1.20）	2.74（1.31）	F（1/217）=0.24	F（2/217）=3.53*	F（2/217）=0.36	中群＞高群
		女子	3.09（1.32）	3.34（1.19）	2.66（1.14）				
	３年	男子	2.77（1.25）	2.63（0.94）	2.61（1.18）	F（1/177）=1.32	F（2/177）=1.13	F（2/177）=0.28	
		女子	2.76（1.40）	2.31（1.17）	2.32（1.10）				
未熟・不安	１年	男子	3.07（0.80）	3.21（0.98）	2.90（1.05）	F（1/213）=3.75†	F（2/213）=0.60	F（2/213）=0.51	
		女子	3.26（0.71）	3.33（0.91）	3.31（0.97）				
	２年	男子	3.28（0.97）	3.07（0.85）	2.86（1.07）	F（1/217）=3.73†	F（2/217）=1.34	F（2/217）=2.53†	
		女子	3.11（0.92）	3.55（0.68）	3.27（0.97）				
	３年	男子	2.92（1.03）	2.69（0.94）	2.79（1.14）	F（1/177）=0.75	F（2/177）=0.46	F（2/177）=0.05	
		女子	3.03（1.07）	2.90（0.85）	2.89（0.98）				
安直・回避	１年	男子	2.26（0.79）	2.17（0.85）	1.76（0.65）	F（1/213）=2.69	F（2/213）=4.08*	F（2/213）=1.04	低群＞高群
		女子	1.94（0.80）	1.96（0.66）	1.79（0.74）				
	２年	男子	2.09（0.77）	2.06（0.83）	1.78（0.80）	F（1/217）=1.58	F（2/217）=4.28*	F（2/217）=0.09	中群＞高群
		女子	1.92（0.78）	1.99（0.75）	1.62（0.63）				
	３年	男子	2.13（0.90）	1.93（0.82）	1.95（0.94）	F（1/177）=3.34†	F（2/177）=0.75	F（2/177）=0.45	
		女子	1.83（0.63）	1.86（0.73）	1.63（0.65）				

			会話３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
未決定	１年	男子	3.13（1.19）	3.04（0.96）	2.62（1.17）	F（1/215）=0.22	F（2/215）=3.05*	F（2/215）=0.46	
		女子	2.86（1.05）	3.05（1.08）	2.67（1.10）				
	２年	男子	3.25（1.15）	3.04（1.23）	2.50（1.25）	F（1/219）=0.50	F（2/219）=4.64*	F（2/219）=0.40	低群＞高群
		女子	3.37（1.32）	2.98（1.08）	2.79（1.36）				
	３年	男子	2.90（1.22）	2.56（0.97）	2.57（1.25）	F（1/178）=1.65	F（2/178）=3.80*	F（2/178）=1.55	低群＞高群
		女子	2.84（1.23）	2.60（0.99）	1.92（1.28）				
未熟・不安	１年	男子	3.08（0.98）	3.11（0.80）	3.04（1.11）	F（1/215）=3.25†	F（2/215）=0.63	F（2/215）=0.22	
		女子	3.26（0.84）	3.46（0.81）	3.20（0.95）				
	２年	男子	3.33（0.74）	3.16（1.03）	2.61（1.00）	F（1/219）=5.03*	F（2/219）=3.87*	F（2/219）=1.70	低群＞高群
		女子	3.38（0.86）	3.33（0.70）	3.23（1.12）				
	３年	男子	2.86（1.30）	2.79（0.80）	2.76（1.10）	F（1/178）=0.55	F（2/178）=0.43	F（2/178）=0.35	
		女子	2.89（0.75）	3.08（0.93）	2.78（1.08）				
安直・回避	１年	男子	2.12（0.79）	2.19（0.75）	1.94（0.84）	F（1/215）=2.72	F（2/215）=5.34**	F（2/215）=0.89	低群，中群＞高群
		女子	2.11（0.78）	2.03（0.74）	1.60（0.57）				
	２年	男子	2.16（0.88）	1.99（0.76）	1.74（0.78）	F（1/219）=1.37	F（2/219）=4.11*	F（2/219）=0.02	低群＞高群
		女子	2.01（0.88）	1.87（0.67）	1.64（0.64）				
	３年	男子	2.04（0.93）	1.97（0.74）	2.06（1.09）	F（1/178）=2.96†	F（2/178）=1.32	F（2/178）=1.27	
		女子	2.09（0.51）	1.73（0.71）	1.60（0.70）				

			指図３群 低群	中群	高群	性別主効果	親との関係主効果	交互作用	親との関係の多重比較
未決定	１年	男子	2.80（1.14）	3.03（1.16）	2.88（1.05）	F（1/216）=0.20	F（2/216）=0.25	F（2/216）=0.39	
		女子	2.91（1.14）	2.85（1.12）	2.75（1.00）				
	２年	男子	2.75（1.33）	2.99（1.14）	3.07（1.29）	F（1/218）=0.04	F（2/218）=2.53†	F（2/218）=1.05	
		女子	2.67（1.05）	3.34（1.22）	2.90（1.37）				
	３年	男子	2.44（1.16）	2.60（1.07）	3.11（1.16）	F（1/177）=3.20†	F（2/177）=1.61	F（2/177）=1.90	
		女子	2.60（1.31）	2.14（1.06）	2.44（1.22）				
未熟・不安	１年	男子	2.96（0.97）	3.15（1.03）	3.10（0.88）	F（1/216）=2.90†	F（2/216）=0.65	F（2/216）=0.50	
		女子	3.22（1.03）	3.19（0.81）	3.43（0.75）				
	２年	男子	2.58（0.96）	3.16（0.90）	3.32（0.98）	F（1/218）=4.92*	F（2/218）=4.39*	F（2/218）=1.72	高群，中群＞低群
		女子	3.20（0.91）	3.35（0.93）	3.36（0.73）				
	３年	男子	2.30（1.04）	2.84（0.86）	3.38（1.09）	F（1/177）=0.49	F（2/177）=6.79***	F（2/177）=2.09	高群＞低群
		女子	2.80（0.88）	2.93（1.02）	3.11（0.95）				
安直・回避	１年	男子	1.82（0.68）	2.29（0.83）	2.09（0.81）	F（1/216）=2.67	F（2/216）=2.69†	F（2/216）=1.04	
		女子	1.85（0.84）	1.97（0.62）	1.88（0.71）				
	２年	男子	1.55（0.74）	2.19（0.80）	2.03（0.78）	F（1/218）=0.63	F（2/218）=10.15***	F（2/218）=1.96	高群，中群＞低群
		女子	1.54（0.48）	1.85（0.80）	2.14（0.74）				
	３年	男子	1.67（0.77）	2.00（0.81）	2.49（0.99）	F（1/177）=4.85*	F（2/177）=6.03**	F（2/177）=2.21	高群＞低群，中群
		女子	1.75（0.52）	1.64（0.69）	1.96（0.84）				

†$p<.10$，*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$　（　）内はSD

は高群より安直・回避傾向が弱い。

３．親との関係の認知のタイプと進路選択自己効力および職業未決定との関連性

親との関係の３つの下位尺度はそれぞれ単独でも進路選択自己効力や職業未決定に関連することが明らかにされた。しかし例えば同程度に「会話」が高くても，「指図」が低く「尊敬」が高い場合と逆に「尊敬」は高くなく「指図」が高い場合とでは親との関係は異なるものとなろう。さまざまな側面の親との関係が組み合わされて現実の親に対する認知が成り立つ。そこで親との関係の３つの下位尺度得点から認知された親との関係をタイプに分け，タイプと進路選択自己効力および職業未決定との関連を検討する。

（１）親との関係のタイプ分け

男女と全学年を合わせたすべてのサンプルについて，親との関係の「尊敬」,「会話」,「指図」の３つの下位尺度得点を用いて，階層的クラスター分析（Ward法）を行った。デンドログラムから４つのクラスターが妥当であると判断された。

各クラスターの特徴をみると，クラスター１は，３つの下位尺度すべての得点が中程度であることから，「平均型」と名付けた。クラスター２は，「尊敬」得点が４クラスターの中でもっとも低く，「会話」得点はやや低く，「指図」得点が４クラスター中もっとも高いという特徴をもっており，「干渉型」といえよう。クラスター３は,「尊敬」と「会話」で他よりも有意に高く，「指図」得点はやや低いので，「尊敬・親密型」と名付けた。クラスター４は，「尊敬」が中程度であり，「会話」と「指図」がともに他の３つよりも有意に低いので，「独立型」と名付けた。

（２）進路選択自己効力に対する親との関係のタイプと性別の関連性の検討

「平均型」,「干渉型」,「尊敬･親密型」,「独立型」のタイプが進路選択自己効力とどのように関連しているのかを検討するために，タイプ×性別の４×２の２要因の分散分析を行った。その結果が表３である。自己効力の全ての下位尺度でタイプの有意な主効果が強くみられ，また性別との交互作用も有意となった。交互作用が有意であったため，単純主効果の検定を行いタイプの多重比較を行った。その結果，男子でも女子でも「尊敬・親密型」は「干渉型」よりも自己効力のすべての下位尺度得点が高いが，「独立型」と「平均型」の自己効力との関連の仕方が性別によって異なっていた。男子では「平均型」は「干渉型」に次いで自己効力が低く，すべての下位尺度で「尊敬・親密型」より有意に低い得

表３　進路決定自己効力についての親との関係のタイプ×性別の分散分析結果

		干渉型	尊敬型	平均型	独立型	性別主効果	タイプ主効果	交互作用効果	タイプ間多重比較
計画決定効力	男子	2.85	3.57	3.02	3.35	F（1/613）=10.97**	F（3/613）=18.54***	F（3/613）=3.46*	尊敬型＞平均型，干渉型
		(0.72)	(0.74)	(0.68)	(0.82)				独立型＞干渉型
	女子	2.87	3.27	2.98	2.83				尊敬型＞独立型，干渉型
		(0.70)	(0.81)	(0.73)	(0.74)				
	性差		男子＞女子		男子＞女子				
相談情報効力	男子	3.20	3.87	3.33	3.63	F（1/613）=0.32	F（3/613）=18.71***	F（3/613）=4.40**	尊敬型＞干渉型，平均型
		(0.88)	(0.82)	(0.80)	(0.91)				独立型＞干渉型
	女子	3.31	3.89	3.58	3.09				尊敬型＞独立型，干渉型
		(0.82)	(0.72)	(0.84)	(0.93)				平均型＞独立型
	性差				男子＞女子				
自己効力	男子	35.25	43.72	37.13	41.04	F（1/613）=7.81**	F（3/613）=21.89***	F（3/613）=4.13**	尊敬型＞干渉型，平均型
		(8.29)	(8.48)	(7.90)	(9.61)				独立型＞干渉型
	女子	35.71	41.08	37.59	34.78				尊敬型＞独立型，干渉型
		(7.96)	(8.61)	(8.31)	(8.20)				
	性差		男子＞女子		男子＞女子				

n：干渉型（男子102，女子90）；尊敬型（男子109，女子72）；平均型（男子89，女子73）；独立型（男子49，女子37）　*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001
（　）内はSD

点であった。また男子では「独立型」が「尊敬・親密型」に次いで自己効力が高く，すべての下位尺度で「干渉型」よりも有意に高い得点であった。これに対して女子では，「独立型」は「干渉型」と同程度か有意ではないがむしろ低い自己効力を示し，すべての下位尺度で「尊敬・親密型」より有意に低い得点であった。また女子では「平均型」は「尊敬・親密型」とすべてにおいて有意差がなく，相談・情報効力では，「独立型」より有意に高い得点であった。

以上のように，「尊敬・親密型」が高い自己効力と関連し，「干渉型」が低い自己効力と関連することは男女に共通していた。しかし男子では「独立型」が自己効力の高いことと，「平均型」が低い自己効力と結びついているのに対して，女子では「独立型」は「干渉型」と同程度に低い自己効力と関連する一方，「平均型」は「尊敬・親密型」に次いで自己効力が高いのである。

（3）職業未決定に対する親との関係のタイプと性別の関連性の検討

親との関係の４つのタイプが職業未決定および性別とどのような関連性をもつのかを検討するために，職業未決定の３つの下位尺度について親との関係のタイプ×性別の４×２の２要因の分散分析を行った。表４にその結果を示した。未決定のすべての下位尺度においてタイプの主効果が有意であり，性別との交互作用はどれも有意ではなかった。タイプ間の多重比較を行った結果，未決定については「尊敬・親密型」が「干渉型」および「平均型」よりも得点が有意に低く，未熟・不安については「尊敬・親密型」と「独立型」の得点が「干渉型」より有意に低い。また安直・回避については「尊敬・親密型」が「干渉型」および「平均型」より有意に低く，また「独立型」も「干渉型」より有意に低い。

「尊敬・親密型」は「干渉型」よりも未決定の３下位尺度すべてで低く，また「独立型」は未熟・不安と安直・回避で「尊敬・親密型」と同様に「干渉型」よりも低い得点であった。「平均型」は未決定と安直・回避で「干渉型」と同様に「尊敬・親密型」よりも高い得点であった。

Ⅳ　討論

１．親との関係の認知と進路選択自己効力および職業未決定との関連性

親との関係の「尊敬」と「会話」については，「会話」の１年生の相談・情報効力を除き，他の進路選択自己効力のすべての下位尺度についてまた学年と性別に関わらず，「尊敬」，

表４　職業未決定についての親との関係のタイプ×性別の分散分析結果

		干渉型	尊敬型	平均型	独立型	性別主効果	タイプ主効果	交互作用効果	タイプ間多重比較
未決定	男子	3.18 (1.08)	2.49 (1.19)	2.91 (1.10)	2.74 (1.23)	F（1/613）=0.60	F（3/613）=7.17***	F（3/613）=1.05	干渉型，平均型＞尊敬型
	女子	2.89 (1.17)	2.49 (1.15)	2.88 (1.20)	2.96 (1.25)				
	性差								
未熟・不安	男子	3.26 (0.88)	2.71 (1.04)	3.12 (0.91)	2.71 (1.07)	F（1/613）=8.33**	F（3/613）=5.83**	F（3/613）=1.89	干渉型＞尊敬型，独立型
	女子	3.31 (0.79)	3.17 (0.97)	3.19 (0.97)	3.05 (0.85)				
	性差		女子＞男子						
安直・回避	男子	2.32 (0.84)	1.75 (0.78)	2.10 (0.73)	1.69 (0.75)	F（1/613）=4.45*	F（3/613）=15.95***	F（3/613）=1.55	干渉型＞独立型，尊敬型 平均型＞尊敬型
	女子	2.03 (0.76)	1.58 (0.58)	1.91 (0.74)	1.81 (0.67)				
	性差		男子＞女子						

n：干渉型（男子102，女子90）；尊敬型（男子109，女子72）；平均型（男子89，女子73）；独立型（男子49，女子37）　*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001
（　）内はSD

「会話」でよい関係が認知されると，進路選択自己効力が高いことが明らかであった。親を尊敬でき大人あるいは職業人としてのモデルとなり得ていると将来の自己像が明確になりそこに至る道筋もある程度見通すことができ，自己効力感が高くなると思われる。

親との関係の「指図」では，２年生と３年生では「指図」を低く認知する生徒のすべての自己効力は，「指図」を高く認知する生徒よりも高いという一貫した結果が得られた。しかし１年生では，計画・決定効力と自己効力では「指図」の高さによる差異が見られず，相談・情報効力について男子だけで「指図」高群と低群が中群より高いという，２年生および３年生と異なった結果となった。これについては次のように解釈できる。２年生や３年生は進路選択が差し迫った課題となる時期であり，自分なりに進路を考え自分で進路を決めなければいけないという不安や焦りが高くなるだろう。このような時に親からの圧力や自分への不満を認知することは，進路選択に対する意欲や自信を低めるであろう。しかし１年生の場合は調査を実施した６月は高校入学間もない時期であり，したがって進路選択はまだ先のことであり，明確な希望進路をもっている生徒も少ないであろう。このように進路についてあまり考えておらず特に希望する進路もまだ持たない生徒にとっては，親からの「指図」は圧力と受け取られるよりも，親と相談する機会であり親から進路の情報やヒントを得ることができるという認知をもたらすと考えることができる。

「指図」の同様の結果は職業未決定についても得られた。２年生と３年生では「指図」を高く認知することは未熟･不安および安直･回避傾向の高いことと結びついているが，１年生では職業未決定のどの下位尺度でも「指図」の効果はみられない。この結果もやはり，進路が自分にとって重要な問題であり自分なりに進路を考えようとする２年生や３年生にとっては親からの指図や不満の認知は職業決定への意欲を低めるためと解釈できる。

２．親との関係のタイプと進路選択自己効力および職業未決定との関連性

「尊敬･親密型」，「平均型」，「干渉型」，「独立型」の親との関係の４つのタイプと進路選択自己効力との関連性を検討した結果，タイプによる明確な差異がみられた。どの下位尺度でもまた男女ともに「尊敬･親密型」は「干渉型」よりも自己効力が高いのである。しかし性別との交互作用もすべての下位尺度で有意であり，「独立型」と「平均型」の進路選択自己効力との関連性が性別によって異なることが明らかであった。男子では「独立型」の自己効力は「尊敬･親密型」に次いで高く，「干渉型」より有意に高かった。一方「平均型」の自己効力は「干渉型」に次いで低く，「尊敬･親密型」より有意に低かった。これに対して女子では，「独立型」の自己効力は「干渉型」に次いで低く，「尊敬・親密型」よりも有意に低く，他方「平均型」の自己効力は中程度であり，相談・情報効力では「独立型」よりも有意に高いのである。

「独立型」は，親との関係の「尊敬」は中程度であり，「会話」と「指図」が４タイプ中もっとも低いという特徴である。「平均型」は「尊敬」，「会話」，「指図」がすべて中程度というタイプである。本研究と同じサンプルを用いて先生や親への進路相談と進路意識との関連を検討した鹿内（2015）では，男子より女子で進路について相談している割合がすべての学年で高く，また相談相手としてもっとも多く選ばれている母親に対する相談率も男子より女子で高かった。男子より女子で「会話」，とくに母親への相談が進路を考えるときに重要なのである。したがって「会話」が低い「独立型」は女子にとっては相談したくてもできない状況にあり，不安を高め，自己効力の低さと関連すると考えられる。これに

対して男子は女子より依存性が低いため,「会話」が少ないことは進路選択自己効力にそれほど関連しない。「会話」が少ないことよりも「独立型」の「指図」が低いことが男子にとっては重要であり，親からの圧力の低さが自分で考え自分で決めるという自信につながり，進路選択自己効力を高めるのであろう。

親との関係の個々の下位尺度ごとみるよりも，タイプとして親との関係を捉えた場合に進路選択自己効力および職業未決定との関連は強く，また性別との交互作用も自己効力感で見られた。やはり親との関係の下位尺度を組み合わせてタイプとしてみた場合に親との関係の特徴がより明確になり，進路意識との関連性も性別によるタイプの意味の違いもより強く表れたのであろう。

３．親との関係の関連性における進路選択自己効力と職業未決定の差異

親との関係の３尺度別に進路選択自己効力との関連を検討した場合，親との関係は１年生の一部で明確な効果をもたなかったものの，全般的に強い関連性を示した。親との関係のタイプによる差異を検討した場合も，進路選択自己効力はタイプによる明確な違いを示し，また性別との交互作用もすべての下位尺度で有意であった。これに対して職業未決定については，親との関係のタイプによる明確な差異がすべての下位尺度で見られたが，進路選択自己効力で得られた効果に比べると弱いものであった。また進路選択自己効力で得られた性別との交互作用はどれも有意ではなかった。さらに親との関係の下位尺度ごとに関連性を検討した場合も有意な主効果がみられないケースがかなりあった。

職業未決定よりも進路選択自己効力のほうが親との関係をより強く反映していることについては，次のように解釈できよう。進路選択自己効力は進路選択に至るまでに必要な計画を立てそれを遂行でき，その結果適切な進路選択ができるという有能感，自信である。したがって個人の内的な特性とみなすことができる。このような内的特性は一時的な状況要因の影響を受ける傾向は弱く，それよりもこれまでの環境の中での経験を通して形成される部分が大きいであろう。高校生の場合親からの影響は大きく，進路選択自己効力も親との良好な関係や親の適切な態度によってさまざまな経験を通して培われてきたものであろう。本研究でも，親をモデルとみなしているかどうかという「尊敬」と親とのコミュニケーションがあり期待を感じているかどうかという「会話」が圧力や不満を示す「指図」よりも進路選択自己効力とより強く関連していた。

これに対して職業未決定はやりたい職業がみつかっているかどうかという状態や職業に就くことに対する態度や構えを示している。これは，親との関係以外の要因，たとえば学校教員，親戚の人，友だちなどの他の人々，テレビ，雑誌，本などマスメディアから得た情報などの影響を受けると思われる。したがって相対的に親との関係の関連性は弱まるのであろう。

〔謝辞〕

本調査にご協力いただきましたH高等学校の先生方，また生徒の皆様に心から感謝いたします。

引用文献

板柳恒夫・竹内登規夫（1985）．進路成熟度尺度（CMAS-4）の信頼性および妥当性の検討　愛知教育大学研究報告（教育科学編），35，169-182.

鹿内啓子（2004）．女子高校生の進路選択に関わる要因　北星学園大学文学部北星論集，41，13-28.

鹿内啓子（2005）．大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因　北星学

園大学文学部北星論集，42，69-88.
鹿内啓子（2010）．大学生における親の就職への態度および親との関係と職業意識との関連　北星学園大学文学部北星論集，47，1-12.
鹿内啓子（2012）．大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連　北星学園大学文学部北星論集，49，1-11.
鹿内啓子（2015）．高校生における先生・親への進路相談と進路意識との関連　北星学園大学文学部北星論集，52，1-9.
下山晴彦（1986）．大学生の職業未決定の研究　教育心理学研究，34，20-30.
鈴木規夫・椎名久美子・石塚智一・柳井晴夫（1997）．高校生の進路選択に関わる要因分析　大学入試センター研究紀要，26，1-27.
高須真紀子（1997）．高校生の進路意思決定に関する因果モデル作成の試み―自己効力理論の視点から―　立正大学哲学心理学会紀要，23，17-29.
Taylor,K.M., & Betz,N.E.（1983）．Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
富永美佐子（2006）．高校生のための進路選択自己効力尺度の作成―内容的妥当性・併存的妥当性の検討から―　東北大学大学院教育学研究科研究年報，54，355-375.
浦上昌則（1993）．進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連　教育心理学研究，41，358-364.